「～N を VtN する」型重複の文法的理解
Naturalness of redundancy from a grammatical perspective : With phrase of “～N+wo+VtN-suru”

程 莉†
Li Cheng

†神戸大学院生
Kobe University (Graduate Student)
teiri2498@yahoo.co.jp

Abstract

In this presentation I shall claim that contextual redundancy in a natural sentence does not necessarily make that sentence unnatural by examining redundancy in the phrase of “～N+wo+VtN-suru” from a grammatical perspective. According to my examination, the naturalness of redundancy varies in accordance with grammatical factors including lexical/ syntactic ones. The details of the examination are as follows:

When “VtN” is a transitive verb, naturalness of redundancy in the phrase of “～N+wo+VtN-suru” is affected by the property of “VtN”. The naturalness will change in accordance with the three factors: (a) whether the word “VtN” have a high degree of Semantic Bleaching or not; (b) whether the “N” in “VtN” is an unsaturated nouns or a saturated nouns; (c) which side of the word “VtN” we are concerned about.

When “VtN” is an intransitive verb, naturalness of “～N+wo+VtN-suru” phrases will change in accordance with the two factors: (a) whether the phrases have high degree of Agency and Volitionality or not; (b) whether the speaker’s consciousness have changed or not.

Keywords — redundancy, transitive verb, intransitive verb, semantic bleaching, unsaturated nouns, saturated nouns, agency, volitionality

1. はじめに

「??馬から落ちて落馬する[1]」のような言語表現における重複は，規範主義的立場では避けられるべき誤りとされる（文献[1][2][3][4]を参照）. だが，客観的観察を重んじる記述主義的立場では，重複は言語表現の自然さを必ずしも損なわないと認められている（文献[5][6][7]を参照）[2]. この立場では，重複を不自然なものとするグライスの「量の公理（maxim of quantity）」（文献[10]）が絶対視されず，重複の自然さを司る原則が量の公理以外にも追求されている.「一致」や「呼応」と呼ばれ，形式的な規則として確立・定着している重複だけでなく（文献[11]），その他の重複についても，文法的な観点から自然さの解明が試みられている（文献[12]）. 本発表は文献[12]と同じ立場から，たとえば「ノーベル賞を受賞する」のような「～N を VN する」型の重複表現（「N」は名詞的要素を表し，「VN する」は動詞的要素＋名詞的要素の漢語動詞を表す）を取り上げ，その自然さに対して，文法から一定の理解が得られるということを論じるものである.

「～N を VN する」型重複表現の自然さについては，先行研究では主に「VN する」が「N」という項を取るかどうか（つまり，VN の内部にすでに備わっている名詞的要素 N がさらに VN の外

[1] 本発表では星印「*」は当該表現の不適格性を，二重疑問符「??」は当該表現の不自然さを，単一の疑問符「?」は当該表現の若干の不自然さを表す. また，重複が生じている部分には適宜，下線を引く.

[2] 価値判断を持ち込む規範的立場と，事実を重視する記述的立場については文献[8]を参照. また，記述的立場では，母語話者にとっては，正用とよくある誤用の間に質的な差はないとされることもある（文献[9]を参照）.

部に現れるか否か)の問題として検討されていた．この場合の名詞の重複について，文献[13]と文献[14]では冗長で許されない誤りだと論じられている．文献[15]は，多くの場合許されないが，VN 外部の名詞 N が「特別の情報」を提供すれば容認されることもあると述べている．また文献[16]は，N が VN の後部の名詞的要素「N」と必ずしも意味的に類似しないが関係づけられる場合が「頻繁に観察される」と述べ，その関係として「包摂関係」「所属関係」を提案している（この点については本発表の第 2 節で詳しく紹介する）．文献[16]では，「VN する」が「N」と関係づけられる項を取るかどうかという観点から，VN が 3 つに分けられている.「投票」のような VN は項を取れ（「清き一票を投票する」「自民党に投票する」），また，「開封」のような VN は項を取らなければならない（「秘匿封筒を開封する」「??太郎が開封した」）のに対して，「飲酒」や「読書」のような VN は項を取れない（「??日本酒を飲酒する」「??古書を読書する」）．しかし，これはなぜかについては説明がなされていない．さらに，文献[17]は，VN のうち，前部の動詞成分が他動詞であるもの（以下「VtN」と記す）を取り上げ，以上の問題を「VtN の自他」の問題として検討していた．つまり，VtN が自動詞であれば表現「～N を VtN する」が不自然で，VtN が他動詞であれば表現「～N を VtN する」が自然であるということが提案されている．しかし，たとえば VtN「除名」と「点火」が他動詞であるが，「??太郎の名前を除名する」や「??焚火を点火する」のような不自然な表現も挙げられるため，以上の問題については，さらに追求する必要があると考えられる．

本発表は文献[17]と同様 VtN に焦点を絞り,「～N を VtN する」型重複表現の自然さを考察する．結論は，VtN が他動詞の場合は「～N を VtN する」の自然さに「VtN の性質」と「修飾要素の効果」が関わり，VtN が自動詞の場合は「～N を VtN する」の自然さに重複表現全体の「動作主性」と「意志性」,「意識の推移」が関わるということである．以下，第 2 節では VtN が他動詞の場合について, 第 3 節では VtN が自動詞の場合について述べる．最後の第 4 節では全体をまとめる．

2. VtN が他動詞

本節では，VtN が他動詞の場合，重複「～N を VtN する」の自然さを検討する．まず，文献[16]で提案された「包摂関係」と「所属関係」を持つ表現と，本発表の重複表現との関係を整理しておく．VtN が他動詞の場合,「ヲ」格を取れることが多いが, VtN 後部の名詞的要素 N と関係づけられた項を必ずしも取れるわけではない．このことを具体的に 3 つの場合に分けて示す．まずたとえば，VtN「受賞」は「ノーベル賞を受賞する」が作れるように,「受賞」の名詞的要素「賞」は「ノーベル賞」と「上位—下位」の関係にあるので,「ノーベル賞」と「賞」は「包摂関係」である場合がある．またたとえば，VtN「除名」は「太郎を除名する」が作れるように,「除名」の名詞的要素「名」は「太郎」と「部分—全体」の関係にある（「名」は「太郎」に所属する）ので,「太郎」と「名」は「所属関係」である場合もある．ただし,「??太郎の名前を除名する」が不自然であるように,「除名」は「包摂関係」を持つ項を取れないと考えられる．さらにたとえば,「??毛筆を執筆する」が不自然であるので，VtN「執筆」のような「包摂関係」を持つ項も,「所属関係」を持つ項も取れない場合がある. 以上観察したことをまとめると, 他動詞 VtN は「包摂関係」を持つ項を取れれば，重複「～N を VtN する」が自然で,「包摂関係」を持つ項を取れなければ（「所属関係」を持つ項を取れるか否かにもかかわらず），重複「～N を VtN する」が不自然であるということが考えられる．言い換えると, 重複「～N を VtN する」の自然さの問題は, 他動詞 VtN の性質に，あるいは VtN が項にかける制約の問題に関連していると思われる．以下では，重複の自然さについて，まず「VtN の性質」から検討を行う．

2.1 意味の希薄化と抽象化

「～N を VtN する」型重複のうち，一部不自然

だと判断される表現は，その不自然さの原因としては，「N が重なって冗長であるから」というよりむしろ，「VtN の N の意味の希薄化と，VtN の抽象化が生じられるため，項のところの「N」と合わないから」ということが挙げられる．「VtN の N の意味の希薄化」ということは，次の例（1）と（2）に見られるものである．

（1）a.??太郎の名前を除名する．
　　b.　太郎を除名する．
（2）a.??京都の光景を観光する．
　　b.　京都を観光する．

例（1）の「除名」は「名前を除く」から「ある人を団体から除く」という意味を表すことになり，例（2）の「観光」は「光景を見ること」から，「史跡・名所を見ること」という意味に変わり，「名」と「光」の意味の希薄化が生じる．そのため，例（1a）と（2a）における外項 N（「名前」と「光景」）が VtN（「除名」と「観光」）の項として取りにくくなると考えられる．つまり，「VtN の N の意味の希薄化」が起こっているため，項のところの「N」の意味と合わないから，重複表現（1a）と（2a）が不自然だと感じられる．これらに対して，重複が生じていない例（1b）と（2b）の方が自然である．類例としては，次の例（3）（4）が挙げられる．

（3）a.??参加者の名前を指名する．
　　b.　参加者を指名する．
（4）a.??真実な言葉を提言する
　　b.　新ルールを提言する．

例（1）（2）と同じ原理で説明できるが，例（3）の「指名」は「名前を指すこと」から「ある人を指定すること」という意味に変わり，また，例（4）の「提言」は「言葉を出すこと」から「自分の考えや意見を出すこと」になり，「名」と「言」の意味の希薄化が生じる．そのため，例（3a）と（4a）における外項 N（「名前」と「言葉」）が VtN（「指名」と「提言」）の項として取りにくくなると考えられる．VtN の N の意味の希薄化が生じる場合，重複でない表現（例（3b）と（4b））の方が自然である．

また，「VtN の N の意味の希薄化」だけではなく，「VtN の抽象化」と関わる部分もある．「VtN の N の意味の希薄化」とは異なり，「VtN の抽象化」が生じる場合，名詞的要素「N」だけでなく，動詞的要素「Vt」の意味も抽象的になる．たとえば次の例（5）と（6）を見てみよう．

（5）a.??毛筆を執筆する．
　　b.　論文を執筆する．
（6）a.??心意を用意する．
　　b.　料理を用意する．

例（5）の「執筆」は「筆を執ること」から「文章を書くこと」という意味に変わり，例（6）の「用意」は「心を用いること」から「前もって必要なものをそろえ，ととのえておくこと」を表すようになり，VtN「執筆」と「用意」には意味の抽象化が生じている．そのため，例（5a）と（6a）における外項 N（「毛筆」と「心意」）が VtN（「執筆」と「用意」）の項として取りにくくなると考えられる．つまり，「VtN の抽象化」が起こっているため，項のところの「N」の意味と合わないから，重複表現（5a）と（6a）が不自然だと感じられる．意味の抽象化が生じる場合でも，重複でない表現（例（5b）と（6b））の方が自然である．一見例外的な表現（7）も挙げられるが，

（7）a. 自分自身の脳を洗脳する．
　　b. 相手の頭を洗脳する．

例（7）での「洗脳」は「頭を洗う」という物理的行為から，「人の思想を根本的に変えさせる」という心理的過程を表す意味に変わり，「洗脳」に意味の抽象化[3]が生じている．それにもかかわらず，

[3] ここでの「抽象化」は，文献[18]で提案されていた二つの抽象化のモデルの一つ――「物理的→心理的」によ

重複表現（7）が自然である．これは「自分自身の脳」と「相手の頭」での「脳」と「頭」も文脈により抽象化されるため,「洗脳」の項として現れることができると考えられ，本当の例外にはなれない．極端の例を挙げれば分かりやすいが，たとえば重複表現「??身体部位である頭を洗脳する」はやはり不自然である．ここでの「頭」は抽象化されていないため,「洗脳」の項として不適切であると考えられる．つまり,「～N を VtN する」の 2 つの「N」の一方のみで抽象化が生じた場合には，重複の容認度が低くなるということである．

ただし，ここでの意味の希薄化と抽象化は連続的で段階性をもつ程度問題として考えている．以上で挙げた VtN（「除名」「執筆」など）の意味の希薄化と抽象化の程度が高く，重複「～N を VtN する」の不自然さもはっきりと感じられる．これらに対して，意味の希薄化と抽象化の程度がより低い（元の意味と新しい意味が共存する）VtN としては,「投稿」や「投資」などが挙げられる．元の意味で現れる場合，自然な重複表現（例 :「PDF 原稿を投稿する」「資産を投資する」）もあるが，新しい意味で現れる場合, 重複でない表現（例:「作品を投稿する」「時間を投資する」）の方が普通である．これらの意味の希薄化と抽象化がまだ中間段階に進んでいる VtN について, これ以上は論じないが，以下では，主に意味の希薄化と抽象化がほぼ生じていない VtN に絞り, さらに考察を進めたい．

2.2 VtN の「N」と関係づけられる項

文献[16]では，VtN の後部の名詞的要素「N」と関係づけられる項が取られる場合が「頻繁に観察される」と述べ，その関係として「包摂関係」と「所属関係」を提案している．本発表ではさらに，重複との関連について，他動詞 VtN は「包摂関係」を持つ項を取れれば，重複「～N を VtN する」が自然で,「包摂関係」を持つ項を取れなければ（「所属関係」を持つ項を取れるか否かにもかかわらず），重複「～N を VtN する」が不自然であるということ提案した．実は，本発表で考察対象として扱われる VtN のうちの一部では, 必ずしも VtN の「N」と関係づけられる項を取れず，VtN 全体の項しか取れないことが観察される．重複の自然さを論じる前に，まず，VtN の「N」と関係づけられる項と, VtN 全体の項との違いについて，次の例（8）と（9）を用いて説明しておく．

（8）a. 乳酸菌を殺菌する．
　　b. 手紙を開封する．
（9）a. 感染予防対策を助力する．
　　b. 環境を配慮する．

例（8a）での VtN「殺菌」の名詞的要素「菌」と「乳酸菌」とは「上位—下位」の関係にあるので,「乳酸菌」と「菌」は「包摂関係」である．また，例（8b）での VtN「開封」の名詞的要素「封」は「手紙」と「部分—全体」の関係にある（「封」は「手紙」に所属する）ので,「手紙」と「封」は「所属関係」である．このように，例（8）での外項 N（「乳酸菌」と「手紙」）は，VtN の「N」（「菌」と「封」）と関係づけられる項である．例（8）とは異なり，例（9）では，VtN「助力」と「配慮」のそれぞれの名詞的要素「力」と「慮」と関係づけられる項が取られなく，VtN 全体の項（「助力」の対象である「感染予防対策」と,「配慮」の対象である「環境」）しか取れない．このような VtN は場合によっては,「ヲ」格よりもむしろ「ニ」格を取る方が普通である．次の例（10）（11）を見られたい．

（10）a. ?国会審議を注目する．
　　b.　国会審議に注目する．
（11）a. ?事業を協力する．
　　b.　事業に協力する．

例（10）の VtN「注目」は「目を注ぐ」の意味を表すが,「目」と関係づけられるものではなく，目を注ぐ対象（例（10）での「国会審議」）が項のところに求められている．その場合,「ヲ」格

るものである．

((10a)) より「ニ」格 ((10b)) を取る方が自然であると判断される．同じことが例（11）にも見られるが，例（11）の「事業」は「力を合わせてあたること」(「協力」) の対象であるため，VtN の N と関係づけられる項ではなく，VtN「協力」全体の項として考えるべきである.「注目」と同様，「協力」の場合も，「ヲ」格 ((11a)) より「ニ」格 ((11b)) を取る方が自然である．このように，VtN はその全体の項しか取れない場合，重複も生じない（重複を無理やり作っても不自然な表現になる）ことが観察される．では，VtN の N と関係づけられる項を取るために，VtN にどういう条件を満たす必要があるのだろうか．このことについて，以下では，「VtN の N が飽和名詞か非飽和名詞か」(第 2.3 節）と，「VtN に対して関心を持つ側面」(第 2.4 節）の 2 点から論じる．

2.3 飽和名詞と非飽和名詞

一般的には，VtN の N が非飽和名詞であれば，N と関係づけられる項が取れ，重複「～N を VtN する」も自然になりやすいが，N が飽和名詞であれば，重複が不自然になりやすいという傾向が挙げられる．たとえば，次の例（12）と（13）を見られたい．

（12）a.　自分の名前を記名する．
　　b.　大阪－神戸戦を観戦する．
（13）a.??料理の温度を保温する．
　　b.??傷害罪を断罪する．

例（12）での「記名」と「観戦」のそれぞれの名詞的要素「名」と「戦」はそれ単独で何を指すのか分からない．文献[19]での定義「非飽和名詞は,「X の」というパラメータの値が定まらないかぎり，それ単独では外延（extension）を決めることができず，意味的に充足していない名詞なのである.」(p.33) によれば,「名」と「戦」が非飽和的である．これに対して，例（13）での「保温」と「断罪」のそれぞれの名詞的要素「温」と「罪」はそれ単独で何を指すのか分かる．文献[19]の定義「飽和名詞は，パラメータが関与せず，それ自体で意味が充足しており，ある対象がその名詞の属性を満たすかどうかを自立的に定めることができるのである.」(p.34) によると,「温」と「罪」が飽和的である. VtN の N が非飽和名詞である場合, その名詞と関係づけられた要素が VtN の外部で求められるが，N が飽和名詞である場合，それと関係づけられた要素を VtN の外部で求めないということが考えられる．飽和名詞と非飽和名詞からもたらすこの違いを認めれば, 例 (12) と (13) の自然さの違いも自然に理解できると思われる．類例としては，次の例（14）～（17）が挙げられる．

（14）　タイヤの跡を追跡する．
（15）　姫様の綺麗なお顔を拝顔する．
（16）??焚火を点火する．
（17）??南京錠を施錠する．

実例（14）と（15）での「追跡」と「拝顔」の名詞的要素「跡」と「顔」が非飽和名詞であるため，それらと関係づけられた要素（「タイヤの跡」「姫様の綺麗なお顔」）がそれぞれ VtN（「追跡」「拝顔」）の外部で現れ，重複が自然である．これらに対して，例（16）と（17）での「点火」と「施錠」の名詞的要素「火」と「錠」が飽和名詞であるため, それらと関係づけられた要素 (「焚火」「南京錠」) がそれぞれ VtN（「点火」「施錠」）の外項のところで現れれば, 重複が不自然になる.「施錠」は「金庫を施錠する」のような表現が作れるが，金庫は施錠の場所（金庫に錠を下ろす）であるものの,「錠」と関係づけられた項ではない．

2.4 関心を持つ側面

実は, VtN の N が飽和名詞の場合, 次の例 (18) ～（20）のような自然な重複表現も挙げられる．

（18）a. 生活費を借金する．
　　b. 高額のお金を借金する．
（19）a. 学費を貯金する．

b. 100 万円を貯金する.

(20) A 型血液を輸血する.

例（18）（19）での「借金」と「貯金」の「金」と，例（20）での「輸血」の「血」が飽和名詞であるにもかかわらず，それらと関係づけられる項が VtN の外部で取られ，重複が自然である．これについて,「VtN の N が飽和名詞である場合, VtN に対する関心を表すことが VtN の外項として現れるが，その関心を持つ側面により，重複が生じうる可能性もある」ということを提案したい．具体的に言えば，例（18）（19）の「借金」と「貯金」の場合は，そのお金の用途（例（18a）の「生活費」と例（19a）の「学費」）や金額（例（18b）の「高額のお金」と例（19b）の「100 万円」）に関心を持ちやすく，例（20）の「輸血」の場合は血液型（「A 型血液」）に関心を持ちやすいと思われる．それらの関心を持つ側面により重複が生じうると考えられる.「借金」,「貯金」,「輸血」とは異なり，VtN「施錠」の場合は，その錠の種類より，錠を下ろす場所（例 :「金庫を施錠する」での「金庫」）に関心を持ちやすいが，その関心を持つ側面により重複が生じにくいと考えられる.

2.5 修飾要素の効果

以上では, VtN の N と関係づけられる項を取るための，VtN に満たすべき 2 つの条件を論じた．ただし，注意が必要なのは，これらの自然な重複がなぜ自然なのかについて，単に「非飽和名詞であるかどうか」と「関心を持つ側面」だけを認めれば十分ではないということである．このことについて，次の例（21）（22）を用いて説明する.

(21) a. ノーベル賞を受賞する.

b. ?賞を受賞する.

(22) a. 多額のお金を貯金する.

b. ?お金を貯金する.

例（21a）における「受賞」の「賞」は非飽和名詞であるため,「賞」と関係づけられる項が取れるというのが第 2.3 節で論じたことである．しかし一方で,「ノーベル賞を受賞する」（(21a)）は「?賞を受賞する」（(21b)）と同等の冗長度を持ち，両方とも「量の公理」に違反して同じ不自然さをもたらすはずであるが, 自然さの違い（例 (a) は（b）より自然であること）が生じたのはなぜかという疑問が浮かべる．同じ疑問が例（22）にも生じられる.「貯金」に対して，関心を持つ側面（ここでは「金」の金額である「多額のお金」）により，重複が生じうるというのが第 2.4 節で論じたことである．しかしその一方で,「多額のお金を貯金する」（(22a)）は「?お金を貯金する」（(22b)）と同等の冗長度を持ち，両方とも「量の公理」に違反して同じ不自然さをもたらすはずであるが，自然さの違いが生じている．この違いを理解するために，項のところの修飾要素（例（21a）での「ノーベル」と，（22a）での「多額の」）の効果を認める必要がある．このような修飾要素の効果は, これまでに一部では気づかれていた. 文献[20]では,「馬から落馬する」は不自然だが,「暴れる馬から落馬する」のように修飾要素を付ければ自然さが増すという形で，修飾要素の効果が指摘されている．また，修飾要素がなぜこのような効果を持つのかについて，文献[15]では，語どうしの上位語－下位語関係が重要と考えられている．具体的に言うと，被編入名詞の外部表示が「複合動詞内部の名詞が外部表示の名詞と上位語の関係にある」という条件の下で重複が容認されると述べられている．ただし，この考えは厳密には支持できないと思われる.

なぜならば，文献[15]の記述によると，たとえば例（21a）の「ノーベル賞を受賞する」については,「賞」と「ノーベル賞」が上位語—下位語の関係にあるからと理解できるが，例（22a）の「多額のお金を貯金する」は,「金」と「多額のお金」が上位—下位の関係にはあっても，上位「語」—下位「語」の関係にはないからである．さらに，あらゆる賞を獲得することを述べる表現としての「賞という賞を受賞する」は自然であるが,「賞」と,「賞という賞」が上位—下位の関係にあるとは

考えにくいということもある．つまり，ここで重要なのは上位—下位ということではなく，N に修飾要素が付いて話し手の意識が N から修飾要素に逸れやすくなる，つまり「修飾要素による意識の拡散」という認知的な事情であると考えられる．修飾要素にはこういう効果があるからこそ，重複が気付かれにくく，その自然さも高くなることが自然に理解できると思われる．

3. VtN が自動詞

VtN が自動詞の場合，「ヲ」格を取りにくいため，重複「～N を VtN する」もほとんど生じないと思われるが，例外的に「ドライバーはビール 3 杯，日本酒 8 杯を飲酒していた」のような自然な重複表現も挙げられる．本節では，「自動詞 VtN が N と関係づけられる項を取れるようになるのはどういうことなのか」ということについて，表現「～N を VtN する」全体の「動作主性（agency）」と「意志性（volitionality）」，話し手の「意識の推移」ということから，一定の理解が得られることを論じたい．

3.1 「動作主性」と「意志性」

本発表での「動作主性」と「意志性」は，文献[21]によるものであるが，そこでは，他動性のパラメータとして「参加者」「運動性」「アスペクト」「期間性」「意志性」「肯定性」「ムード」「動作主性」「O の影響性」「O の個別化」の 10 個が示されている．本節では，主にそのうちの「動作主性」，「意志性」の 2 つの観点から，「～N を VtN する」型重複の自然さを論じる．

ここでの「動作主性」と「意志性」はたとえば次の例（23）に見られるものである．

（23）a.??彼は海を泳いだ．
　　b. 彼は世界の 7 つの海を泳いだ．

日本語の「泳ぐ」は自動詞で，普通は目的語（「海」）を付けないため，例（23a）は不自然である．しかし，例（23b）のように，目的語の前に「世界の 7 つの」という修飾要素を加えれば，表現の容認度が高まる．これは「世界は 7 つの海があって，それらを全部泳いだ」ということで，「動作主性」と「意志性」が高いため，表現（b）全体の他動性も高まるからと理解できる．同じことは自動詞 VtN にも観察される．

まず，「動作主性」との関わりについては，次の例（24）（25）を見られたい．

（24）a. ?ドライバーはビール 1 杯を飲酒していた．
　　b. ドライバーはビール 3 杯，日本酒 8 杯を飲酒していた．

（25）a.??アルコールを飲酒する中年男性がいる．
　　b. ひとり二杯までという制限があったにもかかわらず，無制限にアルコールを飲酒する中年男性がいて…

例（24）では，（b）は（a）より自然さが高い．これは，「ビール 1 杯」より「ビール 3 杯，日本酒 8 杯」の方が「大量のお酒」ということで，それは違法性が高くなり，そういうことをやるというのはドライバーの「動作主性」が高いからだと考えられる．「動作主性」が高ければ，例（24b）全体の他動性も高くなり，「ヲ」格を持つ表現の容認度も高くなることが理解できる．例（24）での具体的な数量表現（「1 杯」「3 杯」「8 杯」）と同様，例（25b）のような限定的でない数量表現「無制限」によって修飾を行われた場合でも，「動作主性」が高いと感じられる．その場合，例（25b）全体の他動性が高くなることを認めれば，例（b）と（a）の自然さの違い（例（b）は（a）より自然であること）も理解できると思われる．

次に，「意志性」との関わりについては，次の例（26）を用いて説明する．

（26）a. ?昨日，彼は 11 本のタバコを喫煙した．
　　b. 毎日，彼は 11 本ものタバコを喫煙する．

例（26a）とは異なり，例（26b）では「毎日」

という表現により習慣的な意味が付与されている．習慣相はしばしば未完了と相性がいいとされているかもしれないが，その一方で，「意志性」がより高くなると感じられる．「意志性」が高ければ，例（26b）全体の他動性も高くなり，「ヲ」格を持つ表現の容認度も高くなることが考えられる．

3.2 話し手の「意識の推移」

第 3.1 節では，自動詞 VtN が項を取れるようになることと，表現全体の「動作主性」・「意志性」との関わりを検討した．ただし，注意が必要なのは，これらの自然な重複がなぜ自然なのかについて，単に「動作主性」と「意志性」のことだけを認めれば十分ではないということである．このことについて，次の例（27）を用いて説明する．

（27）a.??その警官は昨日ビールを飲酒した．
b. その警官は昨日ビールを 5 人の同僚とともに飲酒した．

例（27a）と（27b）では，「警官はビールを飲む」というデキゴトに関して，ほぼ同様の「動作主性」と「意志性」を持っているが，文（b）より文（a）の方は重複が気付かれやすくて不自然だと判断される．この自然さの違いを理解するために，もう一つの要因——話し手の「意識の推移」を挙げる必要がある．話し手の「意識の推移」は，重複要素間の距離によって変わってくるが，例（27）から言えば，文（b）での「ビール」と「酒」の離れる距離は文（a）のより長いため，文（b）では話し手の意識が時間の流れにより移り変わり，「飲酒」を述べる際，前の「ビール」ということばの形式をもはやあまり意識していなかった結果，再度「酒」ということばを言ってしまい，意味的な重複が生じたと考えられる．

意識の推移は文献[22]によるものだが，これは「話し手の意識はたえず推移しており，それはことば（文）にも反映され得る」という考えである．「意識の推移」は重複が生じられる大きな原因の一つとして挙げられる．

4. まとめ

冒頭に述べたように，重複はそれだけではただちに表現に不自然さをもたらすものではない．また，「一致」や「呼応」のような形式的な規則として定着している重複だけでなく，そのほか重複に対しても，文法面からの追求が可能である．本発表は，「～N を VtN する」型重複を取り上げ，その自然さと文法との関わりを検討した．検討の結果は以下の 2 点にまとめられる：

第 1 点，VtN が他動詞の場合は「～N を VtN する」の自然さに「VtN の性質」と「修飾要素の効果」が関わる．一般的には，VtN の N が非飽和名詞であれば，重複が自然になりやすく，N が飽和名詞であれば，重複が不自然になりやすいという傾向が挙げられる．ただし，「VtN の N の意味の希薄化と，VtN の抽象化」や「VtN に対する関心を持つ側面」，「修飾要素の効果」などにより，その傾向から外れる現象も観察される．

第 2 点，VtN が自動詞の場合は「～N を VtN する」の自然さに表現全体の「動作主性」と「意志性」，「意識の推移」が関わる．「～N を VtN する」の「動作主性」と「意志性」が高ければ，表現の他動性が高くなり，重複もより自然になりやすい．また，話し手の「意識の推移」が生じる場合，重複が気付かれにくく，表現が自然になりやいということも観察される．

謝辞

本発表は，日本学術振興会の特別研究員奨励費の補助による研究（課題番号：26･2362，研究代表者：程莉）の成果の一部である．

参考文献

[1] 竹俣一雄・鶴田顕三，(1978)「悪文を書かない 15 のコツの一つ—言葉の重複は見苦しい」『原稿の書き方』, p. 116, ナツメ社.
[2] 千早耿一郎，(1981)『悪文の構造—機能的な文章とは—』, p. 214, 木耳社.
[3] 小笠原喜康，(2007)『論文の書き方—わかりや

すい文章のために—』p. 188, ダイヤモンド社.
[4] 北原保雄,（2011）『問題な日本語 その 4』 大修館書店.
[5] Hunnicut, Sharon,（1985） Intelligibility versus redundancy: conditions of dependency, Language and Speech. 28-1, pp. 47-56.
[6] Durie, Mark,（1995） Towards an understanding of linguistic evolution and the notion 'X has a function Y'. Werner Amraham, Talmy Givón, and Sandra A. Thompson（eds.） Discourse Grammar and Typology: Papers in Honor of John W.M. Verhaar. pp. 275-308, Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.
[7] 定延利之,（2006）「文章作法と文法」『 國文學—解釈と教材の研究』Vol.51, No.12, pp. 79-85, 學燈社.
[8] Lyons, John,（1981） Language and linguistics: an introduction. Cambridge: Cambridge University Press.
[9] Stemberger, Joseph Paul,（1981） Morphological haplology, Language, Vol.57, No.4, pp. 791-817.
[10] Grice, Paul H.,（1975） Logic and conversation. In Cole, Peter, and Jerry L. Morgan（eds.） Speech Acts. New York: Academic Press. pp. 41-58.
[11] Wit, Ernst-Jan C., and Marie Gillette,（1999）What is linguistic redundancy?. Technical Report. The University of Chicago.
[12] 程莉,（2014）「孤立的反復の文法的理解ー日本語と中国語の VN 型合成的表現を例にー」『日中言語研究と日本語教育』第 7 号, pp. 11-21.
[13] 仁田義雄,（1980）『語彙論的統語論』 明治書院.
[14] 島村礼子,（1985）「複合語と派生語ー漢語系複合動詞を中心にー」『津田塾大学紀要』17, pp. 289-301.
[15] 影山太郎,（1980）『日英比較 語彙の構造』松柏社.
[16] 小林英樹,（2004）『現代日本語の漢語動名詞の研究』 ひつじ書房.
[17] 張善実,（2010）「V-N 型漢語動詞の自他ーN の意味の限定化をめぐってー」『第 8 回日本語教育研究集会予稿集』pp. 36-39.
[18] 日野資成,（2001）『形式語の研究ー文法化の理論と応用ー』九州大学出版会.
[19] 西山佑司,（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』ひつじ書房.
[20] 北原保雄,（2005）『続弾！ 問題な日本語』大修館書店.
[21] Hopper, Paul J., and Sandra A. Thompson.,（1980） Transitivity in Grammar and Discourse, Language, 56 (2), pp. 251-299.
[22] Goodwin, Charles.,（1979）"The Interactive Construction of a Sentence in Natural Conversation," G. Psathas（ed.）, Everyday language: Studies in Ethnomethodology, New York, Irvington, pp. 97-121.